授業アンケート結果 報告書

平成 27 年度(2015 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

全体総括

毎年、前年度の授業アンケート結果を集計した報告書を大学のホームページに掲載して、情報公開に取り組んでいる。授業アンケート結果は、過去 4 年間と同様に、平成 27 年度においても、「学生の授業への取り組み」はまだ不十分な点が見受けられるが、「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されており、本学では全学的に「意義にある授業」が行われている。

1．はじめに

本学では、各教員の授業形態・質の向上や授業内容の充実を目指して毎年、前期・後期に 1 回ずつ常勤・非常勤を含めて全ての教員の各担当科目の受講学生を対象として、無記名で実習を含むすべての授業・演習・実習についてアンケート調査を行っている。授業アンケートは、昨年度から「学生自身の授業の取り組み」に関する質問が 5 問、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する質問を 7 問、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する質問を 2 問、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する質問が 1 問と、全部で 15 問の質問を行った。さらに、アンケート用紙には、学生の意見を直接記入できる欄があり、各教員の授業に対する学生の「生の声」を反映させることができるようになっている。アンケートに授業内容を適切に反映させた回答を受講者に促すために、期末試験前の 15 回目（薬学科では 12 回目）までに授業担当者の判断で授業時間内にアンケートの回答を学生に行ってもらった。

授業アンケートの結果は集計され、授業科目ごとに各質問項目に対する 4 段階評価の度数分布図表やレーダーチャートを記載して各授業担当教員に返却している。4 段階評価点数が 8、3、2、0 点であるため、各授業科目に対する評価が厳格に表示されることになり、また、ＦＤの一環として、学科内ですべての教員の担当科目の集計結果を閲覧することができるため、教員相互の講義参観などにより、各教員の授業の改善や向上に役立てることができた。平成 17 年度(2005 年度)以降、授業アンケートを実施して、このような授業アンケート結果に対するフィードバックへの取組みを全学的に実施したが、平成 23 年度からの授業アンケート結果集計を公開して蓄積することにより、「学生一人ひとりの持つ能力を最大限に伸ばし、社会に有為な人材を養成する」本学の教育理念に相応しい教育が継続的に行われているか否かを評価できる有益な資料となると考えられた。

２．授業アンケートの実施方法

アンケート内容と実施の変遷について：

本学では、平成 17 年度 (2005 年度) より授業アンケートを実施している。授業アンケートの質問項目は適宜見直され、特に平成 22 年度 (2010 年度) から教員が授業を改善できるよう質問項目の見直しを行い現在に至っている。また、授業アンケート結果を年度間で比較し教員の授業改善に役立てるために、授業アンケートの質問項目は、同じ項目を使用しているが、平成 26 年から設問項目を 2 項目増やして実施している。各年度とも前後期に各 1 回、年 2 回アンケートを実施している。

アンケート対象学生数と教科について：

平成 27 年度の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
平成27年	前期	424	114	28	142	15685	18489
	後期	466	123	20	143	14929	17773

アンケート集計・解析方法とそのフィードバック方法について：

その集計ののち、各質問項目に対する度数分布表（4 段階評価点数が 8、3、2、0 点）を作成した。大学全体、学部、学科、各科目単位で、質問項目を計算し、一覧 (平均値一覧表) にまとめた。

授業アンケート集計表（度数分布表・評価レーダーチャート）所属学科科目をまとめて学部長へ配付し、その後学科長より各学科において、面談等のフィードバックをしながら各教員に授業アンケート結果を返却するようにした。 平成 22 年度 (2010 年度) 以降、授業アンケート結果を適切に授業改善につなげられるよう授業アンケート結果に対するフィードバックへの取組みを全学的に実施した。そのため授業担当者に対する学科長の面談などのフィードバックが行えるように配慮し、平成 22 年度実施分より授業アンケート結果を学科長に渡し各授業担当者に返却するようにした。具体的な内容や方法は課題として残されている。学科毎に専門が異なり授業方法なども多種多様なため、各学科において適切な方法でフィードバックに取り組んでいる。今後全学統一したフィードバックの方法を検討していく。

３．授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について以下に全学的結果あるいは各学科結果について個々に記載する。平成 27 年度アンケート結果は、過去の結果と比較して、学科間の相違や各学科での前期と後期の相違に着目してまとめた。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

過去４年間のアンケート結果と同様に「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されているが、「学生の授業への取り組み」では、学科間で程度の違いはあるものの、学生の授業における予習・復習時間やシラバスに対しする準備学習が不十分である学科が見受けられる。総合評価としては、本学では全学的に「意義ある授業」が行われていると考えられるが、学生の勉学に対する受け身の姿勢を改善する方策について各学科で検討する必要性があると思われた。

「学生自身の授業の取り組み」

平成 27 年度の前期・後期に関わらず、多くの学科の授業で４回以上欠席する学生は約 10％以下であるが、前期・後期ともにスポーツ健康福祉学科、臨床福祉学科、子ども保育福祉学科は他学部に比べて欠席する学生の割合が多かった（Q1）。また、予習を行っている学生は、どの学科でも約 50％前後に留まっていたが、前後期通して言語聴覚療法、生命医科学科は他学科より低く、一方、臨床工学科や動物生命薬科学科では他学科より際立って高かった。(Q2)。　復習に関しては、前期・後期を通して 60-70％の学生が復習を行っているが、子ども保育福祉学科の復習時間は他学科より短く、一方、臨床工学科や視機能学科では他学部より多くの学生が復習を行っているようである (Q3)。シラバスに対する準備学習についても、全学的に十分行われているとは言い難い状況であった。しかし、臨床工学科では他学科より比較的準備ができている学生の割合が高い状況であった (Q4)。学生の授業に対する意欲は、前期・後期に関わらず、学科間で顕著な差は認められなかった (Q5)。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った目標や習得すべき事項の説明 (Q6, 7)、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力 (Q8, 9, 10)、また、わかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか (Q11, 12) については、前期・後期に関わらず、約 90％以上の学生が教員の努力を感じている。しかし、生命医科学科の学生は、授業の雰囲気作り (Q9)、学生を取り組んだ授業形式 (Q10) や教員の説明 (Q11) に違和感を持っている学生が他学科と比較して多いようであった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度や学習意欲の高まり (Q13, 14) に関しては、改善されているようであるが、昨年と同様に視機能療法学科では他学科より学生の理解度や意欲が若干低いようである。また、本年度は、作業療法学科や生命医科学科でも他学科より学生の理解度や意欲が低いように感じられた。しかし、全体として学生の約 80％以上が授業を理解して、意欲があったと回答している。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

多くの学科では、授業に意義があまりなかったとする学生数が約 10%以下である。しかし、通年を通して、作業療法学科や生命医科学科では授業に意義があったとする学生数が他学科より若干低下していた。(Q15)。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】は学年が上がるに従って欠席回数が多くなる傾向が見られる。これは前期に特に顕著である。後期になると1年生は大学生活に慣れてきたせいか、欠席回数が多くなる。2，3年は欠席数にさほど大きな差はなく、欠席する科目や学生が固定してきていることがうかがえる。【予習復習時間】では、1年生ではほとんどしなかったという学生が40数%いるが、これは去年の半数程度から比べると、ある程度の改善している。2年生と比べて1年生の予習復習をしなかったという学生が少ないことからも、1年生の授業に対する心構えの変化が起きているといえよう。【授業中の取り組み】をみても準備学習にかける時間や、学習意欲も2年生より数値がよい。ゆとり教育時代が終わりつつあることも影響しているのであろう。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

授業の分かりやすさや講義資料の適切さに関しては、1年生の時代には不満を持つ者もいるが、学年が進むにつれて減っていく傾向がある。大学の授業の進め方に慣れてくるからであろう。1年生の前期と後期の結果を比べてみても、そのことが分かる。ただ、4年生になると説明の分かりやすさや講義や資料の適切さに満足している学生がかなり減っているのは問題である。4年次になっても教員が積極的に授業の雰囲気作りや学生の学ぶ環境づくりのために努力する必要があると考える。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度・達成度については、全学年のなかでも前期1年生が「あてはまる」と回答した学生が少ない。このことから入学当初より学生に対してわかりやすい説明や指導が必要であると考えられる。ただ、理解度や学習意欲が1年生の結果と4年生の結果がほぼ同じというのは気になる。2，3年の数値は1年より改善していくのに、4年になって落ちるのだ。これが確かな情報であるとすれば、改善する手立てを考えなければならない。この大学を出るときの満足度にも大きく影響してくる可能性があるからだ。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

昨年は授業の意義について90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。今後は、将来の資格取得についても視野に入れながら学生の学習意欲を向上させ国家試験の合格に繋げていくことを学科が一丸となって取り組むことが必要であると考える。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果　(図Ⅳ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は学年が上がるにつれ、また前期よりも後期に欠席回数が多くなる傾向が見られた。欠席0回の学生の割合は1年前期約59%から4年後期約16%へと低下、1～3回欠席は1年前期約37%から4年後期約67%へと増加、さらに4～5回欠席は1年前期約3%から4年後期約17%へと増加している。これらのことから学生生活への慣れに伴い、欠席回数をコントロールして授業を休む学生が増えていくことが示唆される。【予習復習時間】は学年が上がるにつれ、「ほとんどしなかった」学生の割合は低下する傾向が見られ、予習では1年前期約58%から4年後期約21%、復習では1年前期約51%から4年後期約18%となっていた。【授業中の取り組み】では80%以上の学生が意欲的に授業に取り組もうとしており、学年が上がるにつれその割合は上昇し、3、4年生では90%を超えている。今後の推移を見ていく必要はあるが、予習復習時間および授業中の取り組みにおける学生の回答の改善傾向については、資格試験に対する意識づけを高める等の指導の成果が出始めているのかもしれない。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～12のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。また、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が見られた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ている。また、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が見られた。ただし、「あてはまる」だけに着目すると55%～75%である。各教員は、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫を行い、「あてはまる」の評価を70～80%台へと高めていくことが今後の課題である。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしており、4年生の後期では100%となっていた。学生の理解度・学習意欲の高まりと回答傾向が類似しており、1、2年よりも3、4年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が見られた。「あてはまる」だけに着目すると60%～77%であり、これを70～80%台へと高めていくことが課題となる。2016年度は鍼灸健康福祉コースの完成年度であり、はり師・きゆう師の国家試験を受験することになる。従来のスポーツ健康福祉コースでの社会福祉士国家試験、健康スポーツ関連資格認定試験、教員採用試験等の合格を目指すことと併せて、今の学びが将来につながっていることを学生に授業を通して理解させながら、学習意欲の向上を図っていくことが重要である。

子ども保育福祉学科アンケート結果　(図Ⅴ)

「学生自身の授業の取り組み」

「Q1. 授業を何回欠席したか。」前期において 0～3 回欠席は全学年において 90％であり、出席状況は申し分ない結果であった。後期もこの傾向は同じであり学生の学習に対する意欲が反映されたものと解釈される。Q2. Q3. Q4. はまとめると、「授業及びシラバス記載の事項について、どのくらいの予習・復習や準備を行ったか」を聞くものである。全体的に見れば 30 分から 1 時間が 1 割程度であるが、前期・後期に目をやると、1 時間以上の割合が多少高くなる傾向にある。「授業中の取り組み」については「あてはまる」「ややあてはまる」が前期 80％であり、後期では 85％であった。各学年とも前期より後期の方がその取り組み姿勢に改善がみられる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。」「Q7. 担当教員は、授業の目標や習得すべき事項を、毎回説明していましたか。」について、全学年で「あてはまる」「ややあてはまる」で 9 割 5 分を達成している。「Q8. 担当教員は授業の開始時刻を守っていましたか」については「あてはまる」「ややあてはまる」で 9 割 5 分以上を達成している。「Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。」及び「Q10. 担当教員は、学生に授業への参加を促していましたか (質問等)。」に関しては「あてはまる」「ややあてはまる」がやはり 9 割であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

本項目は「Q13. 授業の目標や習得すべき事項を理解できましたか。」及び「Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。」の二つの問いから成る。まず Q13 について、「あてはまる」「ややあてはまる」が前期では 9 割以上でり後期ではさらにその割合は高くなっている。90％以上を維持していることから、シラバス整備や授業内容の改善の効果が定着したものと考えられる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「Q15. 授業は意義あるものでしたか。」について、本問は総合的な授業評価を問う最も本質的かつ重要な問いとして位置づけられよう。全学年を通し、「あてはまる」「ややあてはまる」が 90％を超えている。この結果は、教員の努力もさることながら、学生自身の理解しようとする姿勢がもたらしたものと考えられる。「ややあてはまる」と回答した割合が 1、3 学年に比べ 2、4 学年で高い傾向にある。すなわち偶数学年、奇数学年で類似した傾向であった。この結果は、各学年の特性ともとれるが明確な理由は不明である。

作業療法学科アンケート結果　(図Ⅵ)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、0 回が 70%、3 回までを含めると 95%程度と概ね良好である。学年別では 1 年が前期に高く後期に低くなっているのに対して、2・3 年は後期の方が高い。予習復習は、各学年とも「あてはまる」が後期の方が多い。特に学年が上がるごとに多くなっている。前期では学年が上がるにつれて「ほとんどしなかった」が減少する傾向にあるが、後期では変化はなかった。学科では 2014 年から 1 年生に対して自主勉強会を実施しているが、学生は自主勉強会を予習復習とは捉えていないのかもしれない。全体像としては，15 年度の学生は 14 前年度よりも取り組み姿勢が全般的に高く、また、特に 3 年生は臨床実習を控えての高さかと考える。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、学生は概ねシラバスどおりの授業進行であると回答している。ただし、シラバスが電子化されて以降、学生がどの程度シラバスを参照しているかについては疑問が残る。教員の授業内容説明についても、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。私語等に対する注意も、授業に対する取り組みも、良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90%を超えている。授業の開始時間の遵守についても、良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90%を超えている。ただし、完全に「あてはまる」は 80%前後であり、授業を実施している教員の感覚とは齟齬がある。全体像としては，15 年度の学生は 14 前年度よりも教員に対するは全般的に高くなっている。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業内容の理解について、後期では「ややあてはまる」を含めると 90%以上であり、どの学年も 20 ポイントほど高くなっている。また、学習意欲の面についても「ややあてはまる」を含めると 90%程度である。しかし、それが予習や復習の実行に反映されていない面がある。全体像としては，14 前年度とほぼ変わらない。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

講義の意義について、学年が上がることに「あてはまる」との回答が多くなる。また、全体的に後期の方が「あてはまる」が高くなる．しかし、2 年については変化がない．3 年生は「ほぼあてはまる」を含めるとほぼ 100%となるが、臨床実習を控えての高さかと考える。全体像としては，14 前年度とほぼ変わらない。

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況について、いずれの学年も欠席が前後期通じて3回までが90%を越え良好である。

予習時間および復習時間は学年による差があり、3年生の後期では後期になると1時間以上学習する学生数が5割程度に増えている。しかし、1年生では、ほとんどしないか30分未満が7割程度おり、しかし、シラバスに記載されている準備学習時間については、30分以上行っている学生の割合が4割程度となっている。

他学科と比較して、欠席が比較的少ないものの、1･2年生の予習時間および復習時間が短いといえる。これらより、1･2年生の自宅学習においては、自らの主体的な学びは出来ていないことが推察される。また、教員として具体的な介入が必要な学生が多くおり、自宅での発展的な学習を促進することが求められる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った授業、授業目標の説明、開始時刻、授業参加への促し、分かり易い説明指導、講義資料の適切さのいずれの項目に対して、全学年共に8割以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答し、教員の授業に対する評価は高く、他学科と比較してもほぼ同等の結果であった。

学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保つに対して、あまりあてはまらない、あてはまらないと回答する学生が1割程度いた。このことは、理解度の低くく現行の指導方法ではついていけない学生もいることを示しており、指導を適切に行う必要があることを示している。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度、学習意欲の高まりに関しては、前後期共に、あてはまる、ややあてはまるを合せて9割以上である。しかし、あてはまるだけで見ると、前期は6割から7割程度であり、後期になるとやや増加し、より理解の深まりや意欲の高まりが窺える。この傾向は、他学科とほぼ同様の傾向にある。4年生の後期になると、理解度、学習意ともに、あてはまらない、ややあてはらないが皆無である。これは、4年生に関しては、国試対策への取り組みがあり、目標が明確になってきているためである。

視機能療法学科アンケート結果　(図Ⅷ)

「学生自身の授業への取り組みにつきまして」
『学生自身の授業への取り組み姿勢が視機能療法学科では比較的他学部より低いと感じられた。』
『対策について検討する必要がある。たとえば、飽きがこないように動画を積極的に活用する。国家試験だけでなく、その科目の面白さ等が伝わる授業を。座学だけでなく、実験、実習等体や五感を働かせる授業を行っていく。学生に、どのような授業をしてもらいたいのかを問うなど双方向性の授業計画、構築を行っていく。』

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」
『視機能療法学科では他学科より学生の理解度や意識が低いようである。』
『特に1、2年次で意欲が高まらない学生の割合が減少しないことについて
対策を考える必要があると思われた。』
「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」
『視機能療法学科では授業に意義があったとする学生数が他学科より若干低下していた。』
『国家試験を中心に授業を行っており、受験校、予備校的な印象も否めない。今後は、視能訓練士の面白さ、患者様の視機能が回復したときの達成感、治療過程の試行錯誤など、より実務的なところも実習等で教育していくべき。このことにより、それぞれの授業の重要性が理解できるのでは。』
『さらなる授業満足度の向上に向けて、教員の授業運用および授業展開などに
工夫の余地があり、学生自身の取り組み姿勢や意欲の向上につなげていく必要があると考えられた。』

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」
『授業中のわかりやすい説明や指導に対する項目において、年々、肯定的な
回答が増加しているものの、2014年度では1年次13.1%、2年次5.6%の学生が
「わかりにくい」と感じており、改善の必要があると思われた。』
まずは、基本から（高校、場合によっては中学で習うようなところ）から根気強く、且つゆっくりと丁寧に教える必要がある。特に基礎科目においては、学習の習慣と達成感を習得させるべく、狭い範囲を確実に消化するような授業を行っていく。

臨床工学科アンケート結果　(図IX)

「あなたの授業に対する取り組み」

授業の欠席回数は、前期より後期の方が増加する傾向が見られた。予習復習の時間に関しては、前期・後期、いずれの学年において、予習と復習の時間は同じ傾向を示した。また、4年次生は予習復習の時間が最も長く、国家試験対策に集中していることが分かる。1年次生は基礎内容が多いため、予習していない学生の比率が他学年よりも高い。予習と復習の時間比率には似た傾向があり、予習を行うものは復習も同様に行うものと推測される。シラバス内容の準備学習も予習復習と同様の傾向であった。「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」については、後期に増加傾向となった。夏期休暇後の適切な対応が必要であるといえる。

「教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の開始時刻」、「授業の雰囲気」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」に関しては、いずれも、前期の方が後期よりも良い傾向となっている。学生の「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」と同様の傾向であり、同一の指導内容であっても学習意欲の低下による学生の受け方の変化が現れていると予想される。4年次生は他学年に比較して良好であり、真剣に講義を受け、積極的に対応している態度が教師にも反映していると考えられる。

「授業に対するあなたの理解・達成度」

いずれにおいても、4年次は「あてはまる」がほとんどを占めており、今までの学習が十分になされていることが伺える。一方、専門科目が最も多く、講義内容も高度となる 3 年次後期には理解度、達成度が他のいずれよりも低くなっており、学生にとってこの時期を乗り切れるかどうかが卒業、国家試験合格を左右する傾向にある。シラバスの配置上 3 年次に総合的な理解が求められており、講義の難易度と学生の授業に対して難しいと感じていることが一致している。2年次までの学習が十分でない学生にとってはこの時期の理解度が低いため、今後本アンケートを基に1，2年次への徹底した指導が不可欠といえる。

「総合評価：授業は意義あるものでしたか」

いずれの学年においても後期の方が前期に比較して低い傾向にあり、他の項目と一致している。本学科では留年制度を設けているため、進級時には希望を持って学習に望むが、夏期休暇を終えると意欲が一時的に低下、後期の授業が難しく感じられるようである。この傾向は欠席、遅刻回数に表れている。欠席、遅刻は特定の学生に限られているため、回数の多い学生に対しては徹底した指導を行っているが、本人が重荷に感じていることもあり、可能であれば留年させて授業に対する理解度を深める方が結果的に良いこともある。意義あると感じているかどうかは、学生が本学科の授業に満足しているかどうかを表しており、満足できないと感じている学生は授業への理解度が低く、教員への不満も多い。教員の対応も時間的に限界に来ていることから、今後は Web 学習などを積極的に取り入れて自由に学習できる環境を作り、各自の能力に応じた予習、復習が可能となるように工夫すべきと感じた。これによって学習の理解度も向上し、不満を持つこともなく授業に積極的な参加が期待できる。

薬学科アンケート結果　(図 X)

「学生自身の授業の取り組み」

いずれの学年においても、欠席 3 回以下がほとんどであった。欠席なしは、1 年前期は約 80%であったが、それ以外の学年は約 60%～70%であった。また、実務実習事前学習の学年（4 年）及び実務実習の学年（5 年）は出席率が高い傾向が見られた。しかし、6 年後期は出席率がやや低かった。

予習については、ほとんどしなかった学生は概ね 50%程度であったが、6 年では減少した。特に 6 年後期では約 10%に減少した。復習についても同様の傾向が見られた。このように 6 年（特に後期）では、1～5 年までと異なる傾向が見られた。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ 90%を超えており、良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った講義かどうかについての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 6 年後期（約 80%）以外は 90%を超えており、ほとんどの教員がシラバスに沿って講義を進めていることが伺えた。授業の目標や修得すべき事項を毎回説明していたかという設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 6 年後期（約 60%弱）以外はほぼ 80%を超えており、かなりの教員が授業の目標や修得すべき事項を説明していることが伺えた。しかし、まだ改善の余地は多いにあると思われる。授業の開始時刻が守られているか、授業中の雰囲気が保たれているか、授業への参加を促したか、わかりやすい説明や指導をしたか、および講義資料は適切であったかと設問に関しても、あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ 90%を超えており、良好であった。これらの設問に関しても 6 年では、1～5 年までと若干異なる傾向が見られた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度については、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価がほぼ 90%超あった。ただし、この項目に関しても 6 年では、1～5 年までと若干異なる傾向が見られた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ 90%超あった。ただし、この項目に関しても 6 年では、1～5 年までと若干異なる傾向が見られた。これは、6 年（特に後期）は、6 年間の総復習（卒業及び薬剤師国家試験の学習）が中心となるために、学生自身が他の学年とは異なるシチュエーションにあるためと考えられる。

動物生命薬科学科アンケート結果　(XI)

「学生自身の授業の取り組み」

平成 27 年度の欠席回数は、全学年ともに少なかった。そのなかで、４年生の欠席回数は昨年度と比較して、前期（欠席０回：26 年度 19%、27 年度 62%）・後期（欠席０回：26 年度 20%、27 年度 67%）ともに明らかに少なくなっていた。

予習復習時間は、ほとんどの学年および学期において少なく、「30 分未満～ほとんどしなかった」と回答した学生が 50%前後以上を占めた。しかし、昨年度と比較すると、予習復習の時間はやや多くなっていた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に関する取り組みが「あてはまる～ややあてはまる」と回答した学生は、全ての学年および学期において 90%以上と高いものであった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

ほとんどの学年および学期において、「授業の目標や習得すべき事項の理解」並びに「授業での学習意欲の高さ」の質問に対して、「あてはまる～ややあてはまる」と回答した学生は 90%以上であり、理解度・達成度は高かった。ただし、２年生の前期においてのみ、「授業で学習意欲が高まりましたか。」の質問に対して、「あてはまらない～あまりあてはまらない」と回答した学生が他の学年に比べてやや多く見られた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

ほとんどの学年および学期において「あてはまる～ややあてはまる」と回答した学生は 90%以上であり、授業が意義のあるもの、と回答した学生が多かった。そのなかで、３年生および４年生は１年生および２年生と比較して授業が意義のあるものと回答した学生が多く見られた。

生命医科学科アンケート結果（図 XII）

「学生自身の授業の取り組み」

2015 年新設学部のため、1 回生のデータのみである。授業欠席回数 0～3 回は前期がおよそ 100%、後期がおよそ 98%であった。学生の授業出席率は大変良好であった。

予習・復習については、1 時間以上行つた学生は前期・後期を通して、およそ 10%前後であった。30 分未満～ほとんどしてしなかった学生は前期・後期を通して、およそ 70%前後であった。これは今後改善する必要がある懸案であると認識した。「学習に意欲的に取り組んだか」という設問に対しては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%前後であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスに沿つた講義かどうか」、「授業の開始時刻も守られていたか」、「授業中の静穏な雰囲気が保たれているか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 95%前後であった。ほとんどの学科教員の講義は高評価であった。「担当教員はわかりやすい説明や指導を行ったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期がおよそ 82%、後期がおよそ 93%であった。概ね学生の満足度は高いことが伺われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期がおよそ 85%、後期がおよそ 92%であった。前期と比較し、後期は専門科目が増えたことがひとつの要因と考えられた。「授業で学習意欲が高まったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 85%であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「授業は意義あるものだったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 92%であった。少数の学生からではあるが、入学前に思っていた内容と異るという意見を聞いている。ただし、大多数の学生は自身の将来の目標を定めたことで、学生自身の理解度・達成度が高くなったことが推察された。